

## 米國で見た日食の思ひ出

東京帝國大學圖書館 山極 花子

世界中の天文學者があたかも二千年の昔エルサレムの星を目當てに集つた博士等の如く、東西南北から皆既日食を觀ようと北米合衆國メーン州に集つたのは1932年(昭和七年)八月31日の事であつた。これらの學者達とは全く趣を異にしながらも同じく東方を目指して、私共はミンガン大學を後にして主人の母校メーン州 Auburn にあるベイツ大學へと旅立つた。

夏休みを利用して出かけた私共の旅行の日取りと、その目的地とが丁度皆既日食の起る中心地帯に當つてゐたことは全く不思議な廻り合せであつた。しかも、遠い國國からはるばる集つて、用意周到に機械を備へつけて、皆既日食を千秋の思ひで待つてゐる觀測隊の所はあひにく天氣が悪く、折角の骨折りも水の泡に歸したのに反し、私共が何も知らずに偶然に立つたベイツ大學の校庭に聳える岩山の上から見た日食は、一點の雲にも妨げられず、誠にさはやかな姿を仰がせてくれるのも亦不思議な縁であつた。

町の藥屋で買った曇りガラスを手にして山頂に腰を下し、太陽が缺けるのを異様な好奇心を以つて2時19分を待つた。ぼつりぼつり近所の人も登つて來た。大學の老教授達も孫の手を引いて見に來てゐる。中には小さい寫眞器を一生懸命に石と石との間に安置させて天文學者きどりをして待つてゐる者もあつた。

段々太陽がかけて來出した。肉眼ではまぶしくて見られないので、例の曇りガラスを両手で目の前にかざして見ると、面白い程にはつきりと見える

夢中になつて見てゐると、あれあれ段段に太陽が細くなつてくるよと思ふ間に、急に何も見えなくなつてしまつた。どうしたのかとガラスを目からはづして見ると、こは如何に、さつきまで眞晝間であつたあたりが俄に薄暗く、太陽の餘光が地上をぼかしてゐる有様はあたかも世の終りが近づいてゐるかの如く、犬の遠吠は一層身にしみるものがあつた。空を仰げば、今正に月は太陽の中央に這入り、綺麗な黄金の光は眞黒な目玉の様な月の周りからこぼれてゐる。偉大なる自然の中にこれ以上の美を目撃する事が出來ようかと喜

びと満足とに溢れた微笑を私共はお互ひにははすのであつた。

僅か二分足らずの瞬くまの出来事ではあつたが、實に私共の一生に大きな深い印象を刻み付けてくれた。

同じ山の上で見てゐた人の中には、地上を早く走る日足の影を見たと言ふ者もあつた。太陽にのみ氣を取られてゐた私共はつひにその偉觀を見のがしてしまつた事は返す返すも残念であつた。

未だ太陽が完全に元に戻らぬ中に、山を下り人道へと出た時に、又目を喜ばせたものは、並木の歩道に一杯に寫つたエルムの葉影が皆三ヶ月形に畫がかれてゐた事であつた。あたかも波模様の浴衣地の上を歩くが如く、御伽噺の國に遊ぶが如き心地して、日食のなげかけた優美な餘蔭を賞めたゝへずには居られなかつた。望遠鏡から全く離れた我々俗人の皆既日食觀察感は只喜びと詩の結晶であつた。

翌日手にした田舎の新聞に『折角準備完成した各國、各大學の天文學者觀測隊は天候思はしからず失望に終つた。然るにたつた一組、遠く日本から來た天文學者は、他の學者達の集つて居る土地に行くには間に合はず、やむを得ず止つて觀測した地は不思議に好天に恵まれ大成功をとげた』とあるのを見た時の私共の喜びは又たとへようもなかつた。之は平山先生の御一行がアルフレツドで觀測された時の事をさしてゐただとは實はつひ最近わかつた事であつた。

### 1943年2月4日の皆既日食計算

(花山急報 195)

第七高等學校教授村上春太郎氏は、この皆既日食の計算を終つた。これによると、北太平洋全部にわたつて部分食が見える。皆既食は北海道より起り、海上を経て、アラスカ半島に終るものであるが、北海道では、網走町と十勝川口との間に於て、西から東へ通過し、旭川、名寄、岩見澤、帯廣、釧路、根室等は皆この範圍内にあり、時刻は午前7時55分頃で、日出直後である。